『若き日の富永先生のエピソード』

昭和２５年入学東京大学教養学部文科二類ⅡＢクラス同級生

田ノ倉亮爾

私達は昭和２５年４月、新制東大第２期生として入学しました。まだ旧制一高生と同居でしたが、矢内原忠雄教養学部長が大なる理想を掲げてこの教養学部の充実に向かって努められた頃であります。此のクラスは英語既習・ドイツ語未習の学生、７２名で構成されていました。この文科二類というグループは概ね文学部の各種学科に進学を希望する学生の集まりであるので、本郷に移行した後に辿れる科は著しく広範囲に分散いたしました。その実例を若干記せば以下の如くであります。

文学部社会学科	富永健一	教養学部教養学科	八木誠一
同上	河村望	同上	荒井　献
同上	国又満		
同上	日向茂		
英文科	小野寺健	法学部	伊東すみ子
同上	谷崎壽人	経済学部	由井常彦
国史学科	石井進	同上	岡崎　　洋
同上	武藤一羊	同上	日下　公人
哲学科	辛島史朗	同上	三上　　満
同上	花崎皋平		

さて此のクラスは卒業後、毎年杜絶することなくクラス会を港区大阪商船三井船舶赤坂クラブにおいて行い、しかも平成九年に全員が執筆する記念誌を作ろうとなって、『Sturm　und Drang 』を発刊いたしましたが、ここの５人で行われた座談会に富永氏の若き日のエピソードが記されておりますので、これを資料として記させて頂きます。この本に富永氏は「自著『日本の近代化と社会変動』について」という原稿も寄せていただいたのでありますが、今度の「語る会」は社会学の専門家ばかりの集まりであるので、これは省略いたします。

第一段階：学生時代　（昭和１９年～昭和３２年）

富永氏いわく、「僕の学生時代は、何よりもまず貧困との戦いでした。勿論あの当時は誰もが貧しかったんですが、僕は個人的な事情からひときは貧しかったと思うなあ。

私は小学校の四年から中学一年まで満州にいて、終戦と同時に父がソ連抑留

にあい、私が東大に入った年の五月に、本当に気の毒なみすぼらしい恰好で帰ってきたんです。

私の高校は都立新宿高校なんですけど、新宿高校（旧制の都立六中）には終戦の九月から編入になったんです。中学一年の時に入ったのは満州の新京一中でした。新京一中は校長先生が退役陸軍中将で、軍国主義が強く、私はそれにあおられて陸軍幼年学校を受験し、およそ性格的に向いていないのに合格してしまいました。それで、終戦の年（１９４５年）の４月に日本へ一人でやってきたんです。

満州から陸幼に入った子供は皆廣島にまわされたんです。原爆とかいろいろあったんですが、それはまぬがれたものの、八月末日に幼年学校が解散になった後、一人になってしまったんです。満州組はみんな孤児になったわけですが、僕はまだ幸せなほうで、伯父が私を養ってくれて、そのおかげで都立六中に入学できたんです。１９４７年に単身で引揚船に乗って帰ってきた母は、学校の事務員をしましたが給料は安く、私は学校の休みの間いろいろなアルバイトをしたんです。

終戦直後ですから新宿高校には二年生の後半に入ったんです。満州の新京一中と都立六中の間は幼年学校で半年切れていたわけですね。幼年学校では藷ばかり作らされていましたから、勉強は全くできませんでした。それに加えて六中時代はアルバイトばかりしてましたからね。

東大に入ってまもなく幸いに父が帰ってきた。父は哲学の教師で、職がなかったものだから母を連れて鹿児島へ行ってしまいました。そこで私は学寮に入ったんです。はじめは三鷹寮、ここで長谷君と親しくなった。それから駒場寮に移って、弁論部に入っていました。北寮１５番。われわれの文二のクラスでは、神内亮君や安部富士男君が駒場寮にいましたね。駒場寮は大変楽しい学生生活でしたが、それはみんなが一様に貧しく、お金がかからない生活だったから気が楽だったですね。汚かったけれどね。」

（司会者：どういうモチーフで専攻を決めたのでしょうか）

「僕は文二に入った時は、社会学なんて知らなかった。父がソ連抑留から帰ってきて、佐賀の同郷人だった高田保馬先生をとても尊敬していたので、その影響で高田先生の『社会学概論』、それから高田門下の青山秀夫先生の『マックス・ウエーバーの社会理論』、そして同じ年に出た清水幾太郎先生の『社会学講義』、これらを讀んだことが僕の思想遍歴の出発点となったといえるでしょうね。

ところで僕らの時代、誰もがどこかの時点でマルクス主義の洗礼を受けたでしょう。僕も同じようにマルクス主義の洗礼を受けたんですよ。昭和二五年のストライキの頃、河上肇が僕にとっての導きの糸だった。１９５１年１月の

或る日、社会学科の先輩で学生運動のリーダーだった吉川勇一さんと、クラスの同級生の武藤一羊君が、僕を日本共産党（武藤はそれをカー・ペーと発音するものだから最初は僕は何のことか判らなかった）の山村工作隊に誘った。「農村調査に行かないか」ってね。八王子郊外の恩方村の公民館で、深夜いろりの火を燃やしながら三人で語りあった。二人はまもなく日本共産党に入党すると言い、私も一緒に入らないかと勧誘した。私は躊躇しながらもハッキリ断った。あの頃の共産党の学生運動のたまり場は、僕の印象では本当に陰惨な感じだったので、その仲間入りはしたくなかったんですよ。僕は共産党は日本を幸福にしないと思っていた。これが転機で、僕はマルクス主義からどんどん離れていったんです。僕は毎日、武藤一羊君と議論した。彼はどんどん左寄りになってゆく。議論では彼の方がいつも勝った。彼は大変な秀才で、僕は彼を尊敬していた。吉川勇一さんも同じです。しかし僕は違う方向へ向かった。その大きな拠り所は高田保馬だった。僕は図書館で高田保馬と河上肇の有名な論争をずっと辿ったんだ。当時の学生で、河上肇じゃなくて高田保馬に附くなんていう学生は僕以外にはいなかったでしょうね。僕は河上肇の『資本論大綱』と高田保馬の『社会学概論』を比べながら考えた。河上のマルクス経済学解説はたしかに素晴らしい。しかし河上にはオリジナリテイは何もないと思った。高田保馬はジンメルやデュルケームやテンニエースなどを、翻訳の未だ無い時期に沢山読みこなしているけれども、彼はそれらを解説したりは一切しないで、結合定量の法則から導出される社会変動についての諸命題を演繹的に体系化する、そのオリジナリテイに感服しちゃってね。だから私は高田保馬を取ると心にきめた。勿論僕も高田保馬『経済学原理』とかを通じて近代經濟学を知ったけれど、経済学部はマルクス主義が支配している所のようだからそこから逃げよう、とね。僕は社会学は左翼がいない学問だと思っていたわけ。でもこれはとんでもない誤解で、行ってみたら実はそうじゃなかった。

北川隆吉さんという社会学研究室の助手が皆をオルグして日本共産党へ入れちゃったのね。僕一人だけ共産党に入らなかったからイジメにあっちゃってね。だから学部学生から大学院の一、二年にかけての頃は社会学研究室には寄りつかなかった。専ら一人で勉強ばかりしていた。高田保馬から遡って、マックス・ウエーバー、デュルケーム、ジンメルなどを一生懸命に読んだ。それからパーソンズ。パーソンズの『社会的行為の構造』には、ジンメル以外はみんな入っている。それに高田保馬やデユルケームなどは皆、過去の人だけれども、パーソンズは今、一番、活動している社会学者だと思ってとりついた。パーソンズの思想を自分で跡付ける、其処から僕の社会学の勉強が始まったのです。」

第二段階：高度経済成長時代（昭和４０年・１９６５～平成２年・１９９０）

（ここで同級生の河村望氏による富永観を挿入する）
「1970年頃になると、もう私はオールド・レフトでやられるほうで、さきに話に出てきた武藤や吉川さんなんかはもう新左翼のほうへかわったわけです。さっき富永さんの話を聞いてわかったことは、彼がはじめ高田保馬を勉強したことは彼のパーソンズ社会学の理解に役立っていることです。富永さんは卒論でパーソンズを扱ったのですが、彼の讀みは当時としては実にみごとであった。何故あんなきちっと読めるのかと思ったら、今日やっとそのわけがわかった。高田保馬っていう人は、或る意味でパーソンズの先をいってたわけね。

学生時代に一生懸命、高田保馬を研究したから、富永さんは初期の頃ああいう輝かしい業績が出せたのだと思います。だけどそこからの一つの問題は、やはり60年の後半からむこうでラデイカライゼーションなどがおこって、それが日本にも導入されるようになると、富永さんと私は不思議と立場は違うけど、守りに立たされることになった。そこのところで客観的にみたら、二人とも結局、日本の社会のことを解明するということで、ニューレフトの批判に答えようとしていたということがわかりまして、立場はちがっても当面する課題とか問題意識都いう点では、意外と似ているというのがわかりました。」

（ここから富永氏の発言に戻る）
「あのね、僕は卒論でパーソンズを一生懸命やって、それは河村さんが先程洞察したように、高田保馬とパーソンズは字づらが大変違うけれど、精神においてあい通ずるところがあるように思う。つまりどちらも近代化理論に行き着いたと思いますね。それからミクロとマクロをつなげて考えているところも共通していますね。

僕はパーソンズをアメリカの学者としてというよりも高田保馬とつなげて理解していたところがあった。それで修論はパーソンズを広げるために『行動理論の研究』と題して其の際ミードを取り込んだんですよ。これには清水幾太郎『社会学講義』の影響もあったと思う。ミードの『一般化された他者』というのは、多数の行為者に共通する社会意識の形成ですからね。それから社会心理学を取りこんで、あの頃ゲームの理論なんかよくわからなかったけれどあれも相互行為理論の一形態として、取りこんで、それで行動理論をつくったつもりになっていた。実はまったく不十分なものにすぎなかったのですが、ともかくそれは僕の言葉でいえばミクロ社会学だったわけですよ。ミクロ社会学で基礎が出来たからこれからマクロ社会学だとそう思った。それが丁度1957年、つまり高度経済成長が始まってまもなくの頃ですよ。僕はパーソンズの社会システム論というのを日本の現実におきかえて考えていたんですよ。しかしまだ僕には日本の近代化史そのものをやろうという気はなかった。

日本の戦後史をみながら社会変動を説明する理論の枠組みをつくろうとそう考えたわけね。それで当時１９６０年代の近代化理論が出はじめて、それをパーソンズと重ねあわせて、僕なりの社会変動論をつくったわけです。・・・・
僕の心の中では実にあれは戦後史理解の枠組みだったわけですよ。日本の高度経済成長はいかにして可能であったかという・・・。」

（河村氏の意見）
「彼の学説は、廣い意味での日本の近代化を都市化と近代化と西欧化という三つの過程に分析し、戦前から戦後にかけての廣い意味での日本の近代化のもっている特異性を、普遍的近代化の理論的な枠組みから最初に問題にした点で、すぐれたものだと思います。」

（ここから再び富永氏の発言）
「ソーシャル・チエンジという言葉を初めて書いたのはオグバーンなんですよ。彼が１９２２年に出した本の題名です。そういうわけで、社会変動というのは僕の言葉ではないけれど、僕は社会変動というのは社会構造の変動であると、定義したわけです。つまり社会システムの構造変動。僕はそれが技術＞経済＞社会という筋道で進むとし、しかしながら経済成長と社会構造の変動とのあいだには、タイム・ラグ（時間のずれ）がある。このタイム・ラグの故に近代化にともなうさまざまな社会問題の発生がある、としたのです。当時は『経済成長』という語が毎日の新聞を賑わすキー・ワードでしたが、そういう言論は経済成長を謳歌するばかりで、その表面を一皮めくると社会システムの構造変動がある、ということに注意を向けなかった。当時はそういうことを書いた人は誰もいなかったんです。１９７０年代になって、西ドイツのツアプフという学者が、僕の本は日本語ですから勿論知らずに、僕と同じことを僕の本と同じ題名の編著の中で述べた。」
「要するに日本の近代化は自前の近代化ではない。近代化は西洋人がつくったものである。そこで日本の近代化は文化伝播による近代化である。文化伝播であれば伝わり易いもの、受け入れ易いものから伝わる。
それは技術と経済、黒船以来、経済果実の素晴らしさに日本人の関心は集中した。経済の近代化は一番受け入れ易く、近代化の動機付けが容易である。だから戦前も戦後も、日本はいちはやく経済発展に成功した。しかし近代化というのは経済発展だけじゃない。そのほかに政治発展（民主化）と狭義の社会発展（社会構造の近代化）と文化発展（思想や宗教の近代化）がある。たとえば日本の民主化は戦前から或る程度進んだけれど、社会的近代化（家父長制家族の解体と村落共同体の解体）は戦後改革まで起こらなかったし、文化的近代化

はいまだに進んでいない。

民主化は経済成長よりはうんと遅れたけれども、戦後のアメリカン・デモクラシーの輸入より前に自由民権と大正デモクラシーで日本に入っていた。でも僕のいう社会的近代化、つまり家族の近代化（核家族化）と、村落共同体の解体と都市化は、決定的に戦後改革の産物なんですよ。だからそれまで日本人が独自で発展させたものではないんです。

日本の民法改正だってあれは占領政策の産物ですからね。だから社会的近代化は政治的近代化よりももっと遅れる。文化的近代化にいたってはまだ全然おこなわれていないじゃないかと思われるんだけれど、オウム真理教を含む「新新宗教」と呼ばれる非合理主義の宗教が若者の心をとらえるのは、文化的近代化が日本に欠けているからではないでしょうか。」

第三段階：　還暦を過ぎて　（平成３年・１９９１年以降）

（河村氏発言：第三段階というと、今廣い意味でのナショナリズムが根底から問われているような時期であると思います。）

富永氏発言：「僕はねえ、ナショナリズムの復権というよりもアジアの復権だと思うよ。脱亜入欧のテーマが、また入亜に戻ったわけですよ。それが日本にとってこれからの課題となる。そうでないと日本はアジアの中にうまく受け入れてもらえないと思う。

やっぱり日本の近代化は西洋とは別なんだ。日本は結局西洋にはならなかった。

アジアの近代化というけれど、それは実際には中国人の近代化なんですよ。台湾だってシンガポールだって香港だって皆中国人なんです。まあ福建と広東と、もっと此の方まで含めて全部一体化した中国人社会がアジアの資本主義を担うようになりつつあるわけですよ。これは２１世紀のアジアの資本主義を作る母胎となる。それに日本と韓国が参加して２１世紀の西洋的近代化と並ぶアジア的近代化が出来る。北朝鮮はそのうちに内部崩壊して難民が続出して、南北統一が実現するというのが僕の希望的観測です。其の内にあって日本はアジアで唯一の西欧的近代化を作ろうとした。福沢諭吉以来、日本はアジアだが西洋と一体化しなくてはいけない、と考え続けてきた。中国人はそうじゃない。

僕は、中国の資本主義はポスト・モダンじゃないと思う。ポスト・モダンってのはフランスの思想ですよ。それが日本へ入って来て、どうなったかというと、日本の前近代を「あれは結構なものでした」と云って復活する思想と結びついた。

中国人はそうじゃない。中国の伝統的価値が近代化の原動力となる。だけど

それは近代の否定ではなく、中国の近代化は文字通り中国の近代化なのであって、中国の西洋化ではないと。だからそれを聞くと日本人はショックを受ける。今まで日本人は、日本人が西欧人と違うところがあれば、それは本人が悪いからだみたいに思ってたでしょう。

ところがもう一度アジアに引き戻される。

つまりそこにアジアの精神があったということを再発見する。そういう経験をこれから日本人はすると思う。」　完